ここはどういう場所で、どんな暮らしがあったのだろう
地域資源を再発見／再認識／再考する

RE:プロジェクト通信

水が張られた田んぼは、青空をきれいに映していた。

〈仙台市 荒井字笹屋敷〉

ゆっくり しっかり 耕す暮らし 8

この地域を知るためのメモ

仙台市若林区

荒井字笹屋敷地区

3・11その時

地震が起きたのは、菊地さんご夫妻がビニールハウスの中で収穫したほうれん草の出荷作業をしていたときだった。周りの家々から瓦が大きな音をたてながら地面に落ちていくのを目の当たりにし、農作業の間は常時つけているラジオからは「大津波警報」という言葉が繰り返し流れた。何が起こっているのか分からず留まっていたところ、消防団員の息子さんから強く促され、地震発生から30分後にようやく避難した。「津波はこっちまで来ないって、軽く考えてたんだな」と菊地柳秀さんは話す。自宅はヘドロで覆われ、田畑も海水をかぶり瓦礫の中に埋もれた。目の前の作業に途方に暮れそうになりながらも無事に復旧作業を終えることができたのは、たくさんのボランティアの助けがあったからだった。

南小泉を経て仙台バイパスを越え、荒浜へと向かう県道137号線。仙台東部道路を越えるとやがて笹屋敷の集落が見えてきます。「笹新田西」「笹新田」と記されたバス停が目印です。住所は「若林区荒井字笹屋敷」ですが、この「笹新田」という呼び名こそ、江戸時代初めの新田開発で生まれた集落の歴史を物語るものです。

慶長16年(1611)10月28日、推定マグニチュード8.1の大地震と大津波がこの地を襲いました。領内の犠牲者は1783人、牛馬85頭が溺死したと伝えられます。仙台に城下町の建設が始まって10年目のことでした。

しかし、この大災害のあと、藩による開墾が本格化し、荒野は徐々に田畑に整えられていきます。藩が推進したのは、家臣に荒地を開墾させ、開いた田畑をその領地にするというやり方でした。中でも、田畑となる可能性のある土地を見立て、開発を願い出た者に許す進め方は「見立新田」とよばれました。

寛永2年(1625)、丸森領主だった佐々元綱(さささもとつな)が湿地を見立て、その開墾にあたらせる家中の武士たちを移住させたのが笹新田の始まりです。「笹十六屋敷」と伝えられる家々は細い道に向かい合い、短冊状の地割に居久根を育て畑をつくって、周辺の土地を開いていきました。故郷を離れ開墾に邁進する武士同士の結束は、さぞ固かったでしょう。手に鍬を携えていても身分はあくまで武士。裏通りに建つ道場での剣道の稽古や、鎮守の権現社での読書手習は怠らず、消防訓練にもぬかりがなかったようです。

度重なる凶作や干ばつに見舞われながら、こうした生活は幕末まで続きました。

明治を迎えたとき、人々は迷うことなく愛着ある土地を耕し生きていくことを選びました。明治2年(1869)に丸森領主、佐々久馬(さささきゅうま)が藩に願い出て帰農が許されたのは、丸森からの移住者を含め45家族。267人がこの地で新たなスタートを切ったのでした。

それから140年余り。代替わりしても、丸森からきた武士だという誇りと強いつながりの中で、農作業や冠婚葬祭で助け合う暮らしが続けられてきました。田畑から得る米や野菜のほか、大沼をはじめ周辺にあった沼で採集する蓮根やハスの葉も大きな恵みをもたらしたようです。荒井村だった笹屋敷は、明治22年(1889)に七郷村となり、昭和16年(1941)に仙台市に合併しました。

東日本大震災の大津波は、なぎ倒した松や住宅を飲み込みながら高さ1.5メートルほどの高さで押し寄せて5人の命を奪い、集落は瓦礫と泥で埋もれました。ボランティアの手で復旧が進み、震災後2年が経つ現在は、県道を通る限り津波の被害は認められないほどですが、町内会長の菊地柳秀さんによると、戻ってきた方は約120戸口のうち6割。慶長の大津波の復興で生まれた集落は、再び襲いかかった大津波で岐路に立っています。

しかし、それでも5月には3年ぶりの田植えが行われ、集落は少しずつ明るさを取り戻しています。企業化されるなど、営農の仕方は変わっていくかもしれませんが、土に向かい実りを得る。その先に新たな展望が見えてくるのではないでしょうか。

▲ バス停の表示は「笹新田」。荒浜方面を臨む。（2013年5月撮影）

【参考文献】
・宮城縣史編纂委員会『宮城県史8』宮城縣　1957年
・仙台市史編さん委員会編『仙台市史　通信編3近世1』仙台市　2001年
・七郷の今昔を記録する会『ふるさと七郷』タス・デザイン室　1993年

編集後記

今年度もRE：プロジェクトを続けてまいります。震災から3年目を迎え、語られる言葉も変わってくるかもしれません。その土地に暮らしてきた方たちの声、言葉に耳を傾けながら、引き続き取り組んでいきたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

今回お話を聞いたうちのお一人、高山よささんから、自宅前の荒浜にまっすぐ続く県道について「荒浜の人たちの往来がなくなって寂しい」という言葉が聞かれました。田植えも再開され、畑にも緑が戻りはじめた3回目の春。もちろん、住まいもきれいに整っています。しかしながら、それでも暮らしを取り戻すことはとても困難なのだと、改めて考えさせられました。

（田）

次回は2013年8月ごろに発行予定です。ウェブサイトもぜひご覧ください。

◆ウェブサイト「RE:プロジェクト」制作日誌
http://re-project.sblo.jp/
◆ツイッターアカウント：RE_project

『RE：プロジェクト通信』第8号　2013年6月発行
【主催】仙台市・公益財団法人仙台市市民文化事業団
【編集・発行】RE：プロジェクト事務局（仙台市市民協働推進課内）
〒980-0802　仙台市青葉区二日町1-23　二日町第四仮庁舎2階
TEL：022-214-8002／FAX：022-211-5986／re-project@bunka.city.sendai.jp

※この紙はリサイクルできます。

まちの記憶

つながりの中で、取り戻す

西大立目祥子

●武士の末裔としての誇り

3年ぶりの田植えになった。満々と水をたたえた田んぼが大きく空を映し、緑の苗が風になびく。田植えの風景が、これほど希望に満ちて感じられるとは。トラクターがアスファルトの道にぼとぼと落としていった泥の固まりも、新たな季節の兆しに見える。

県道137号線の南側、今では裏通りに思える細い道の両側にほぼ同じ間口の大きさで屋敷が並んでいる。地元の人はこちらを「表町」とよぶのだそうだ。かつては茅葺きの屋根が並んだという風景を想像しながら道を歩くと、熱心に茄子（なす）の植え付けをする人の姿があった。別の家では2棟並んだハウスの中で、胡瓜（きゅうり）がすくすく育っている。ここに生まれ育って88歳になるという高山よささんから聞いた「ここはうんと働くところなの」ということばを思い浮かべた。よささんは「だから昔は嫁の来てがなくて、愛子だの山の方から連れてきた」と笑い、「よそにくらべると米の取れないところだったから、つつましく生活しないといけないっちゃ」と続けた。

重労働を担う苦労はいうまでもないが、自分を律する武家のふるまい方が日々の暮らしにあったのでは、と想像した。明治、大正生まれの人ならば、佐々のお殿様に付き従ってこの地を開いた武士の末裔であることに、少なからぬ誇りを抱いていただろう。よささんは、高等科2年を終えたあと、青年学校の裁縫教室にみっちり4年通い、家を継いで、農作業のかたわら和裁の仕事を引き受けてきたという方である。「私は何時間でも正座してられんの」と話す背筋が伸びている。

笹新田の武士による開墾は、慶長16年（1611）の大津波のあと始まったが、幕末近い天保年間になっても続けられた。冷害、干ばつ…たび重なる障害を乗り越えさせたのは、この春私たちが期待を持って眺めるのと同じ、田に育つ若苗と、黄金色の実りであったに違いない。

●蓮根掘りに湧いたころ

よささんが少女時代を過ごした昭和戦前、いや戦後になっても農家は貧しく重労働にあえいでいた。「女の子は高等科2年の卒業前に子守に出されたし、弁当のおかずはたくあんと梅干しだけで隠して食べるんだっちゃ。ご飯は丸麦混ぜてたしね」

笹屋敷では、現金を得るために女たちの多くが町場に野菜を売りに出た。リヤカーで、自転車で、背負って、原町、南小泉、木ノ下、南鍛冶町、そして塩竈まで出かけお得意さんをまわった。夏の盛りには一日置き、畑に育つ野菜に急かされながら。

野菜の生産が本格化する春先、最盛期を迎えるのが蓮根（れんこん）だった。笹屋敷の周辺には、大沼、川戸沼、北長沼、南長沼などの湖沼が点在し、中でも大沼で採れる蓮根は絶品だったという。「ここは蓮根村」と話す皆川あき子さんは昭和34年に小松島から嫁いできて、蓮根掘りを新鮮な目で見つめていた。「3月ごろかな、農業用水を貯める大沼の水が少ないときに、日が決められて一家から男の人が一人出てジョレンみたいな道具で掘るの。夕方、女の人たちがそれを洗いに行って、翌日背負って売りにいったのね」ご主人の幸一さんが、「いまの蓮根とは形も味も違う。直径5、6センチで長さは1メートル、ゴザに（↙）

▲高山よささん

▲皆川あき子さん（左）と幸一さん（右）

▲「表町」と呼ばれた、かつてのメインストリート。この通りに向くように家を建てていた。

▲2月に菊地さんを訪ねると旬の曲がりねぎの収穫を終えたところで、ハウスの中は甘い匂いに満ちていた。

▲菊地柳秀さん（左）と多恵子さん（右）

包むと端が出るんだ」と話す。茹でるとほんのり紫色になった蓮根はほくほくねっとりとして、傷がつくなどして自家用にまわされたものは、白和え、天ぷら、煮物になって食卓をにぎわした。

大きな農家には、周辺の農家の次男、三男が農作業の手助けのため奉公人として住み込んでいて、10代後半から20代初めの食べ盛りの若者たちが、楽しみに待ったのが休み日だ。毎月1日、10日、20日の休み日になると、どこの家からもぺったんぺったんと餅をつく音が響いてくる。餅は最高のごちそう！庭先でつきあがったばかりの餅にあんこやきな粉をまぶし、一人一升もの餅をつぎつぎと平らげた。町内会長の菊地柳秀（りゅうしゅう）さんは「子どももうんと楽しみでね」と振り返る。

「田植えが終われば餅、稲刈りが済めば餅。それを必ず近所に配ったよね、おすそわけしたのね、あの頃は」と、菊地さんの奥さんの多恵子さん。きつい労働と質素な食事が続く毎日だから、たまのごちそうは近所同士で分け合い、だからこそ忘れられない記憶となっているのかもしれない。

●あの暮らし方をこれからに

柳秀さんの子ども時代の思い出話はつきない。夏休みは居久根の木陰で宿題を済ませ、あとは大沼で遊びほうけた。堰の上から飛び込み、泳ぎ、浮かんでいるヒシの実をおやつにし、ときには水鳥の卵を盗み食いして。涼やかな風の中で上級生に教えてもらいながら仕上げる夏休み帳、体にまとわりつく草の感触を感じながらの堀遊び、中学のころかきこんだ5膳の朝ごはん……。その情景を思い浮かべる。これは豊かさそのものではないか。泥にまみれる田植えも肩に血をにじませながらの堆肥担ぎも知らない私は、ここにめざしたいこれからの暮らしを重ね見てしまう。

多恵子さんがいう。「でも、おすそ分けは消えたの。あまりにも便利になったのよ。何でも売っているもの」大沼からは蓮根が消えた。誰もが除草剤の使用を口にする。除草剤は、炎天下での腰を折っての草取りから農家を解放したが、銘産品だった蓮根を絶滅に追い込んだ。田植えも稲刈りも機械化が進み、農作業はよささんが“殿様百姓”とよぶほど楽なものになった一方で、米の価格は下がり、気がつけば集落から子どもと若者の姿は消えていた。そこを大津波が襲ったのだ。

瓦礫と泥に沈んだ集落を復旧させたのは、数百人のボランティアと培ってきた地域の結束だった。家を整え戻った人たちは、集落の北に300年にわたって維持してきた共同墓地を整え墓参りをすませた。歩くと墓地の一番奥には「佐佐元長之墓」と刻まれた墓碑が立ち、佐々家のもとに集い家族のように暮らしてきた集落の歴史をあらためて教えられる。北側にはこれから田植えの始まる田んぼにたっぷりと水が張られていた。まるで、ここに眠る人たちに見てもらうかのように。

吹きつける風が冷たい。か細い苗は大丈夫だろうか。つながりの中で秋の実りを切実に願う人々の背中に、私は失ったものを取り戻していく未来を見たい。

【お詫びと訂正】

第7号「まちの記憶」にて、町蒲生にお住まいだった平山みついさんのご家族について「網元」だったとご紹介しましたが、誤った記載でした。地引網の網元だったのは町蒲生の伊藤酒屋さんです。平山さんのお宅は、かつては肥料業と魚屋、そして仕出しを行っていました。現在は魚屋の営業が息子さんの手によって再開されています。

誤った記載によって、関係者の皆さまにご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

2ねん

武田こうじ

ことばは
カラッポだけど
なにか
はなさなきゃ

なみうちぎわで
カラッポ
なにも
こたえられないまま
くちづけして

あたらしいかなしみ
もっとなきたいのに

ガソリンは
カラッポ
じてんしゃで
いいよね

くらしにかくれて
また
かんたんに
いきている